

寛骨臼骨切り術の合併症低減と 早期回復を目指して

寛骨臼形成不全は、本邦では若年女性に生じることが多い。軽微な画像所見の割に痛みは激烈なことがあり、自分の股関節が壊れるのではないかと不安にかられる場合がある。その多くは人工股関節置換術が適応されづらい若年者であり、関節温存療法として寛骨臼の構築学的再建目的に寛骨臼骨切り術が適応される。手術は正確な寛骨臼骨切りと適切な回転・移動による症状の軽減、長期にわたる股関節機能の維持を目的とするが、その手術手技は容易ではなく、様々なピットフォールに注意が必要である。特に神経障害や大量出血、偽関節あるいは関節症性変化の早期進行は長期予後に悪影響があり、これらの課題を克服しなければならない。

日本で開発・発展してきた寛骨臼骨切り術は、これからの若い世代の整形外科医により安全な術式として継承されるべきと考えられる。これまで培われてきた治療の考え方・術式・合併症の予防など各術式において様々な変遷があり、寛骨臼骨切り術の歴史、手術のコツや合併症の低減、術後の早期回復に関する対策に関して9人のエキスパートの先生に解説をいただいた。

寛骨臼骨切り術は様々な呼び名があるが、歴史的には3つの流れがあるとされ、その歴史と変遷に関しては原 俊彦先生に詳しい解説をいただいた。九州大学の西尾篤人先生が考案した寛骨臼移動術における早期回復と合併症の予防では本村悟朗先生に解説をお願いした。東京大学の田川 宏先生により開発された東大式寛骨臼回転骨切り術の変遷と早期回復、合併症予防に関しては東京大学の田中健之先生をお願いした。東京慈恵会医科大学の村瀬鎮雄先生が行った大転子切離寛骨臼回転骨切り術に関しては天神彩乃先生に執筆をお願いした。広島大学の安永裕司先生のRAO手術手技に関しては庄司剛士先生に、名古屋大学の長谷川幸治先生が開発した偏心性寛骨臼回転骨切り術では坪井真幸先生に解説をいただいた。Ganz osteotomyを源流とする福岡大学元副学長の内藤正俊先生が開発したcurved periacetabular osteotomy (CPO)に関しては、その流れを受け継いでいる木下浩一先生に解説をお願いした。原 俊彦先生が開発したspherical periacetabular osteotomyに関しては兼氏 歩先生に解説いただいた。近年、これらの寛骨臼骨切り術においてもコンピュータ支援手術の技術が広まりを見せている。この分野で第一人者の横浜市立大学の池 裕之先生にはコンピュータ支援技術による寛骨臼回転骨切り術の低侵襲化についての解説をいただいた。

本特集が、寛骨臼骨切り術における術式の選択、成功への道筋への参考になれば幸いである。

(名越 智)